

# 想



# 随

## 水瓜(すいか)を

### 食べなかつた話

宮川 久子

この夏は、どういふものか、水瓜を食べることが少なかった。以前は自他共に許す(？)水瓜好きで、夏は三度の食事がはりにでもというほどであったが、近年はどうもその記録を保持できなくなり

そうだ。そのわけを考えてみると、ひとつには、昔の水瓜の味と違って、あまりおいしいと思わなくなったこと、ひとつには、食べたあとの皮の仕末が面倒になったこと、などのようである。前の方の理由では、食べものが豊富になって、私の食生活がゼイタクになったという次第では決していない。私は至って簡素なものが好きだから、自然のままの味のあるものに飛びつくというだけのこと。それが、この二月ごろのことであったか「最近の水瓜はカンピョウを台にして作り出す」と農家の方から直接に聞いた。私はアツと驚くと同時にゲンナリしてしま

ゆく現代人の生活では、何も彼もポリ袋詰めにする作業というのが増えているわけだ。つまり、私たちは、いつのまにか、自然から遠ざかっているのだと、ここまでは誰もが思うようになってきた。とんでもない、トマトもナスも菊の花もカーネーションも季節を問わず目の前にあって、それだけ自然はゆたかになったという人があるかもしれない。けれども、日本人の自然観の特徴は、かんたんな言葉にさえも表現されていることを私たちはもう一度見直す必要があるように思う。

あのひとつ、何でも持っているだろうか、贈物、何にしたらいふか迷ってしまふ。そんなヒト私たちの周辺にもいて、あなたと私を困らせる。例えば、マツシタさん。私の場合は、県庁や熊日のマツシタさんではなく、電器産業のマツシタさんの重役だ。京都の旅行で個人的にたいへんお世話になったので、クニに帰ってからお返ししなければ、と私は考えた。私のクニは熊本だ。同じようにマツシタさんにお世話になって、私と同じように考えたヒトにドイさんがいる。ドイさんのクニは鹿児島だ。ドイさんは、マツシタさんへの進物、何にしたらよいかを迷わぬ。私はドイさんに一任して、連名で送って貰った。ドイさんは、電気製品をマツシタさんに贈るような人ではない。

沖津 正巳

### 共に贈る言葉は

やがて、マツシタさんから礼状。「種子島特産、本種子鉄、家内がたいへん喜びました。——縁以外は何でも切れる——のフリーズ、気に入りました」と、礼状が形式的でない。私は、ドイさんに、してやられた、と思った。サツマ如きに肥後の国、負けてはならぬのである。私は、川尻包丁を贈るべきだった。

この品と共に贈るべき言葉は、「なまくら主婦では扱いかねる、と言われている、熊本、川尻の包丁です」この言葉、平山謙二郎編著「熊本の名産」からひろった。名著である。肥後象嵌のところでは、「使えば使うほど艶を増す」とある。ナルホド、そんなシロモノ、わが郷土に実存することを、あなたと共に確認しよう。

愛すべき数々の郷土の名産に、愛さるべき言葉が足りない。と私は思う。私も考えてみよう。

——球磨焼酎——「飲まないよりも一日酔がない」

誇大広告と言われそうだが、サニあらず、三十キロのリュックを背負って根子岳に登って見たまえ。途中でアゴを出す。そこで友人にリュックの中味全部持って貰う。リュックを空にしたあなたは、きつと実感する。

「何も背負わないよりも軽い」と。球磨焼酎を飲んだ翌朝は、そんな気分です。

後の方の理由では、母が生前にしていったように、水瓜の食べガラは一応ザルの中に入れて陽に乾し、水気が切れたところでポリ袋に詰め、ゴミ収集日に出すという段取りだが、これが案外厄介な作業である上に、ゴミの量を忽ちにして増大させるのである。つまり、ゴミを多く出す食品はなるべく避けようという気持が、いつかしら水瓜を買わなくなったことと結びつくらしい。昔はゴミを捨てるのにも、土を堀って埋めるというテがあったけれども、次第に土から遠ざかって

また、昨年八月十二日から二十六日まで、日本交通公社主催の鹿児島からのチャーター船「日本丸」で歴史の旅に船で行き二泊、また引き続き十月十日から十四日まで、観光で四泊の団体旅行で行って来た。よって一昨年から三度訪韓したことになる。

母校一年生入学の時の私達の校長先生は、広島県出身の米國コロンビア大学卒業の方で、一高から東大法学部在学中の先輩の死のこともあり、身体を大切にしてくださいと教えられた。いわゆる良き意味の自由主義であった。戦後の我が国は米國の良い点、悪い点までもミックスされて入っているのではないだろうか。モラルは、戦後は米國の方が我が国よりも上であるとのことだ。韓国では義務を果たしてから権利を主張するのでと、初歩のことをガイドさんがバスの中で言われたのを思い出すが、我が国ではどうだろうか。また、自主・自立の愛國(土)心も旺盛であった。

こゝまで書いたところに電話。東京に嫁いだ娘からである。——中元の季節、その相談。「フン、フン」と聞いてやっている、

韓国で一番目についていることは、戦前とは異なり外国に来たなど言うことはもちろん、釜山とソウルを結ぶハイウェイ(高速度路)の整備されていること、町の清潔さ、掃除のいき届いていること。男性の服装は背広にキチンとネクタイをしめ一般に地味で、とりわけネクタイがおとなしかった。若い男子にも長髪族のいないこと、言うまでもなく生徒の服装もきちんとしており、ホックをはずしている者やラップスボン等もなく、女性では素顔か薄化粧が多く、ワンピースやミニスカートの女性も質素で、十代、二十代の若者たちは希望にあふれ表情も明るく、若々しいポブラ並木やプラタナスのように、女学生の赤いホップはみな健康美に輝いていた。そして女性のすべてがスラリとしたきれいな足をしているのも目についた。

静かな朝の国、韓国の四月の気候は大体、日本で言えば北陸地方に準ずると考えればよく、寒暑の差が激しく、大陸性の気候で、特に四月など気候の変り目には不順で風が強く、雨降りの日もあったが、翌日はカラッと晴れるのも特色だ。十月のソウルは北海道の旭川に準ずると考えればよい。

## 三たび韓国に旅して

見延 勇

近くて遠い国——近くて近い国、韓国に——昨年四月十五日から四月二十日まで六泊七日、母校創立五十周年記念を兼ねて、卒業後三十二年振り、終戦後二十八年振りに全国から恩師二名、同窓生八十名(県内三名)がバスポートをもって大阪班と福岡班に別れて出発、韓国にて合流、釜山・馬山(福岡班のみ)・慶州・大邱・ソウルと行った。

国全体がしまっており、その点日本の方が何か恥ずかしい思いであった。国民所得からすれば、米國・日本・韓国と開きがあるが、韓国の人は親日的で素朴で礼儀正しかった。ちょうど我が国の戦前のようであった。

母校一年生入学の時の私達の校長先生は、広島県出身の米國コロンビア大学卒業の方で、一高から東大法学部在学中の先輩の死のこともあり、身体を大切にしてくださいと教えられた。いわゆる良き意味の自由主義であった。戦後の我が国は米國の良い点、悪い点までもミックスされて入っているのではないだろうか。モラルは、戦後は米國の方が我が国よりも上であるとのことだ。韓国では義務を果たしてから権利を主張するのでと、初歩のことをガイドさんがバスの中で言われたのを思い出すが、我が国ではどうだろうか。また、自主・自立の愛國(土)心も旺盛であった。